

生成の 社会学を めざして

価値観と性格



作田啓一 著

有斐閣

生成 社会学を めざして

価値観と性格

作田啓一 著



有斐閣

■ 著者紹介

作 田 啓 一 (さくた けいいち)

1922年 山口県に生まれる 京都大学文学部

卒 現在 甲南女子大学文学部教授

主著 恥の文化再考(1967・筑摩書房)／価

値の社会学(1972・岩波書店)／深層社会の

点描(1973・筑摩書房)／ジャン-ジャッ

ク・ルソーー 市民と個人(1980・人文書院)

／個人主義の運命ー近代小説と社会学

(1981・岩波新書)／ドストエフスキーの世界

(1988・筑摩書房)／仮構の感動ー人間

学の探求(1990・筑摩書房)／増補・ルソー

ー 市民と個人 (1992・筑摩叢書)



生成の社会学をめざして

1993年3月20日 初版第1刷発行

著 者 作 田 啓 一

発 行 者 江 草 忠 敬

発 行 所 株式会社 有 斐 閣

[101] 東京都千代田区神田神保町2-17

電話(03)3264-1314〔編集〕

(03)3265-6811〔営業〕

振替口座 東京6-370番

京都支店〔606〕左京区田中門前町44

印 刷 中村印刷株式会社

製 本 吉田三誠堂製本所

© 1993, Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

★定価はカバーに表示してあります

ISBN 4-641-07562-X

まえがき

私たちは毎日特定のものごとについていろいろの経験をしている。新しい経験もあるし、似かよった経験の繰り返しもある。しかし経験は特定のものごとについての経験に尽きるわけではない。私たちは何かに夢中になっている最中に、あるいはその経験のあとで、「自分は生きている」あるいは「自分はその時生きていた」と感じることもある。それは生きているという感じの経験であり、特定のものごとについての経験ではない。特定のものごとについての経験とは異なったこの「生きていること」自体の経験は、私たちが子供時代から遠ざかるにつれて少なくなる。大人になるにつれて、何かに夢中になることがむづかしくなるからだ。

これまでの社会学の理論体系は、明白に宣言されているかどうかは別として、一般に特定のものごとについての経験の上に組み立てられてきた。そこでこれらの体系は、「生きていること」自体の経験を大事にしている人々にとっては、自分たちに無縁の体系、空々しい体系と見えたのである。私もそのような人々の中の1人であって、長年のあいだ空疎な体系からの離脱を模索してきた。こういった人々の中には、体系というものの自体が本来的に空疎なものであると見なし、体系から離れ、その場限りのテーマをつぎつぎに選んで、物書きにいそしむ人もいる。しかし私は体系なるもの一般が本来的に空疎なのではなく、空疎でない体系もありうると信じてきた。それは、社会学者ではないが、アンリ・ベルクソンの哲学のような魅力的な体系に、若い頃親しんだためである。ベルクソンの体系は決して空疎ではない。それ

は「生きていること」自体の経験から出発する体系だからである。私はいろいろの模索のあと、ベルクソニズムを社会学に持ち込んで体系を作る試みに熱中し始めた。そうである以上、この試論に付せられるタイトルはおのずから決まってくる。すなわち「生成の社会学をめざして」。

題名が示す通り、本書は「生成の社会学 (sociologie de devenir)」に向けての1つの序論であり、完成した理論体系の提示ではない。そのような提示が可能になるのはいつの日かわからないので、とりあえず序論の形でまとめることにした。本書は4つの章から成っている。第Ⅰ章では、生成の社会学なる立場がどうして成立するかの根拠が述べられている。したがってこの章は、言葉の古典的な意味での方法論の論述に当てられている。第Ⅱ章では、経験の当事者である自我が、発達段階にしたがって類型化されている。この章で展開される自我論は、自我心理学の観点から自我の構造を明らかにすることをめざしているのではない。そうではなくて、それは自我が他者あるいは外界と出会い、関係を結ぶ様式のタイプを明らかにするためのものである。この自我論はまた、いわゆる〈個人・対・社会〉の関係一般を論じているのではない。そうではなくて、それは、その関係の2つのタイプ——超個体我間の関係と社会我間の関係——を明確に区別するためのものである。しかし〈超個体我〉の世界と〈社会我〉の世界とが分化して登場するためには、〈独立我〉の世界があらかじめ出現していなければならない。〈超個体我〉と〈社会我〉の差異は、それぞれが〈独立我〉とかけ合う仕方の差異である。

第Ⅰ、第Ⅱ章は「生成の社会学」の基礎理論の論述に当てられている。第Ⅲ章では、この基礎理論から派生した価値観と性格の理論が取り上げられる。この理論においても、第Ⅱ章で示された〈独立我〉

〈超個体我〉〈社会我〉の3分法が基本的な枠組となっている。第IV章は、前章で提示された性格類型の1つを、歴史的な性格類型の中に見いだそうとする試みである。それは権威主義的性格と名づけられてきたヒトラー主義者の性格にはかならない。私はこの社会的性格を、特定の時代と場所に出現した突然変異としてではなく、近代社会を産み出した近代人の社会的性格の1つのヴァリエーションとして見る。ヒトラー主義者の破壊性は近代の文明と切り離し難く結びついている。〈独立我〉が〈社会我〉と協働して近代の文明を築き上げたが、その文明の1つの産物として権威主義的な破壊性もたらされた。〈独立我〉が〈社会我〉とではなく〈超個体我〉と協働する方向に、私は近代が超えられてゆく可能性を見る。それゆえ、私は本書を通してポスト・モダンとは何かという問に対する1つの答えを用意したつもりである。超近代への志向は、本書を支える価値観であると言ってよい。

本書には、説明の粗い箇所がところどころあるし、用いた文献の数も少ないので、専門書の形を備えていない。そのかわり、議論の筋道をできるだけはっきり浮き上がらせようと努めたから、一般の読者にも読みやすい本になっているのではないかと思う。

最後に、この本はだれのために書かれたかの問について考えてみたい。F. ニーチェが好みそうな問である。社会学のいろいろの命題が正しいかどうかは、その命題の中に登場する人間が自分の経験に訴えることによってチェックできる。これが人間の学である社会学の有利な点である。自然科学にはこのようなチェック機関はない。太陽の周りを回っている地球は、どうして回転しているかを問われても答えることができない。これに対して、たとえばゲーテやトルストイに引きつけられて彼らの周囲に集まってくる人々は、またこういう人々の観察者は、自分の経験に訴え、このような集合が決して偶然ではないこ

とを了解するだろう。経験に訴えることができるのが社会学の強みなのだ。社会学の1分野である「生成の社会学」についても同じことが言える。この分野にもいくつかの基本的命題があるが、それらが正しいかどうかは人間の経験によってチェックできる。ただし、それは特定のものごとについての経験ではなく、「生きていること」自体の経験である。この2つの経験は現象学的には異なった位置を占める。それゆえ、本書はだれのために書かれたかが明らかとなった。社会学の予備知識をもっているかどうかは問題ではない。学問なるものにかかわっているかどうかさえ問題ではない。本書は「生きていること」自体の経験を大事にしている人々に捧げられる。

目 次

第Ⅰ章 生成の世界・定着の世界 1

制度の学と人間の学(1) 生の欲動と死の欲動(3) 動物における生と死の調和(5) 人間における生と死の不調和(7) 肥大したエロスへの対抗(8) 以下の出発点(11) フロイトの2元論の転変(13) シュハテルのフロイト批判(16) 埋没性情動と活動性情動(18) ミンコフスキーの2つの死(19) タナトスの2つの相(21) 生と死の再定義(23) 自己境界の問題(24) 無境界の体験(27) 生成の論理と定着の論理(28) 生成の世界と定着の世界(30) ベルクソン対デュルケーム(33) 溶解体験(36) イヨネスコの体験(37) 質的データの信憑性(41) 精神分析と現象学(43)

第Ⅱ章 前自我・独立我・超個体我・社会我 47

自己意識と自己認知(47) ミードのIとMe(50) 育成する他者と監視する他者(53) 再びIとMe(56) 母子一体の前自我(57) 第1次自分中心性(59) 第2次自分中心性(61) 独立我と対象中心性(61) 言語の類別機能(64) 世界の2分法構成(66) 2元論的垂直構造(68) 規範の受容(69) 死からの逃走(71) キリーロフの失敗(72) 自己完全化(74) 言語の喚起機能(77) 発達同一化(78) 昇華の概念(81) リクルールのフロイト批判(82) 独立我の2面(85) 自我の4相の位置づけ(86) 超個体我の出現(87) 対象中心的知覚と関心(89) 2つの一体性(91) 個別的对象を超えて(93) 真理の問題(94) 再び第2次自分中心性(96) 第2次埋没する社会我(97) 分離しながら

の結合(100) 自我の3相への生命力配分(101) 閉じた社会の中の責務(103) 2重構造の類似性(106) 開いた社会の中の愛(107) 静的宗教の機能(109) 動的宗教と溶解体験(110) 開いた魂=超個体我(111) ベルクソンの発生論図式(113) 超個体我の成長(115) 超個体我Ⅱ(117) 神秘家の2つの型(118) 預言者の2つの型(120) ウェーバーとベルクソン(121)

第Ⅲ章 価値観と性格……………123

目標選択の3つの文脈(123) 有用規準と原則規準(124) 共感規準(126) 類似する他の類型論(129) 規準と目標の組み合わせ(131) 価値と価値観(133) 3つの自我の特徴と価値観(136) 有用志向と原則志向(136) 共感志向あるいは離脱志向(138) リビドー的3類型(140) 3つの志向による性格類型(141) 多数派の2類型(142) 理想と現実の葛藤(145) 自然の貴族と精神の貴族(147) 共感志向の自己充足面(149) 自然と精神のバランス(150) 素朴なナルシスト(153) 学生運動の担い手の性格(154) 性格変容のパターン(156) 原則志向の衰退(158) 柔和な若者たち(159) 他者志向の2類型(161) 自己充足の理想像(163) 人間の内的革命(164) 伝統的行為の外面性(166) 制度と感情のずれ(168) 正統と異端(168) 内面性への転換(170) 正統=外面性, 異端=内面性(172) 真の自己はどこにいるか(173) 制度から衝動へ(175) どれが素顔か(177)

第Ⅳ章 権威主義的性格またはヒトラー主義者たち……………179

権威主義的性格の概念(179) ビューリタンの近代人(180) グノーシス主義の残存(183) ナチズムの特殊性(185) 災害症候群(185) 指導者と追従者(188) 仮構機能(190) 自我の防衛規制(192) 対外的防衛と対内的防衛(194) ヒトラー主義者の4類型(196) 説得と恫喝(198) 自己の4層(199) 身体に訴

える説得(201)	操作の立場は合理的(202)	人間特有の破壊性
(203)	再び独立我の2面(205)	ヒトラー主義は異端派か
(206)	超越と共感の従属性(209)	日本人の中の権威主義
(211)	権威主義的2分法構成(214)	

あ と が き	215
---------	-----

事 項 索 引	216
---------	-----

人 名 索 引	219
---------	-----

第 I 章 生成の世界・定着の世界

制度の学と人間の学

私たちはいろいろの制度の中で生活している。経済制度、政治制度、宗教制度、教育制度、家族制度、等々。制度とは一定の目的を果たすための集団と、その集団の規範や慣習などから成る装置である。たとえば、家族制度は夫婦や親子などの関係を含む家族集団、それに扶養や相続に関する法律、結婚式・披露宴・ハネムーンなどの慣習から成り立っている。社会学はそれぞれの制度の集団的側面や、制度間の相互連関を研究する学問であると言われてきた。前者を研究するのが狭義の社会学であり、後者を研究するのが広義の社会学である。

どちらにしても制度の学としての社会学は、制度と人間の関係を考える場合、制度が人間を形成する面を強調する。たとえばE. デュルケームは、人間の中に根強く広がっている近親相姦への嫌悪を、家族制度の存続の必要から説明した。近親間、特に親子・きょうだい間の制度的な義務の感情に個人的な好悪の感情が侵入するなら、家族は崩壊するだろう。インセスト・タブーがなければ、そうなるに違いない、とデュルケームは言う*。社会学の知識が普及した今日、たとえば犯罪や非行を、家族制度、経済制度、教育制度、情報伝達（マスコミ）制度などによって説明するのが常識となっている。

* 小関藤一郎編訳「近親婚の禁止とその起源」『デュルケーム家族論集』川島書店、1972年、p. 97-9。

〈制度が人間を作る〉という思想は、事実を説明する理論を導くだけにとどまらなかった。現実においても、小さな自給自足の共同体を新たに作って住みついた人々もいたし、現在もいる。この種の実験が最大の規模にわたって行われた事例を、私たちはいくつかの社会主義国家の建設に見ることができる。この実践を導いたのは〈制度が人間を作る〉という思想であった。すなわち、資本主義制度のもとでは人間は小さな自我の中に閉じこめられていて、他者を愛し協働する潜在能力が抑えられているので、これを社会主義制度に変えれば、人間の諸能力は解放されるだろう、と考えられていたのである。今日、東ヨーロッパの諸国ではつぎつぎに社会主義制度の修正が行われている。これらの国々において社会主義制度が巧く機能しなくなったからだ。しかし、私はその原因を「人間は常に私欲を優先させる生きものだから社会主義制度が失敗するのは当然だ」といったような仮定の中に求めるつもりはない。この話題をもち出したのは、東欧のこの社会変動の中に国家権力によって作られた〈制度が人間を作る〉実験——この種の実験一般ではなく——への不信を読み取れるように思えたからである。

そこでこの時点で〈人間が制度を作る〉という逆の考え方を検討してみることにしよう。「人間は常に私欲を優先させる生きもの」といった人間性の仮定をしりぞけるためにも、このアプローチは必要である。しかし〈制度が人間を作る〉という考え方は、19世紀末から20世紀初頭にかけてデュルケームが近代社会学の基礎を築いて以来、社会学の動かし難い常識となっている。人間の無意識の動作、思考や感情のパターンにいたるまで、制度の拘束が及んでいるのを社会学者は見届けてきた。微に入り細を穿つと言おうか、とめどもなく進行してきたこの探索は、もう今では限界に達したと思えるほどである。そこで私は〈人間が制度を作る〉という逆の方向のアプローチを見直して

みたくなった。しかし、このアプローチによる〈人間の学としての社会学〉が〈制度の学としての社会学〉にとって代わることができるとは考えていない。事実のうえで、人間の行動の大部分は制度的に拘束されている、と見る〈定着の論理〉によって巧く説明できるからだ。ただ、私としては、このアプローチによって制度と人間の関係のこれまで見逃がされてきた側面に光を当ててみたい、そしてそのことによって、社会学の新しい可能性を探ってみたい、と考えているにとどまる。本書の目的はこのように限定されているので、〈人間から制度へ〉のアプローチに従って諸制度の成立を説明するところにはまだはいらないことを、あらかじめ断っておかなければならない。

〈制度が人間を作る〉派の中で世界に最も強い影響を与えたのがK. マルクスであるとすれば*、数少ない〈人間が制度を作る〉派の代表者として名を挙げるにふさわしいのはS. フロイトであろう**。両者は共に人間の無意識が人間を動かす大きな力であることを発見した。しかし、マルクスの考えている無意識は制度が人間の中に作り出したものであり、フロイトの考えている無意識は人間の理性によってはとらえられない欲動(Trieb)に根ざしている、とされている。

生の欲動と死の欲動

欲動は本能に近い概念であるが、本能よりももっと根底的な層に位置している。たとえば、食欲という本能はそれを刺激するものが固定しており(蝶にとっての花びらの色)、また目標も固定している(栄養となるもの)。欲動の場合は刺激物と目標が固定していない。たとえば性欲をとってみると、そのことがわかる。刺激物は多様であり、視覚、聴覚、触覚、臭覚のすべてが刺激を受容するし、また目標も異性だけではなく同性でも、また自己自身でもありうる。さらに目標である身体のさまざまな部分が下位目標となりうる。個体間の結合をもたらす

* もっとも、『経済学・哲学草稿』を書いた頃の初期マルクスは〈人間学〉に傾いていた。

** 18世紀にさかのばれば、J.-J. ルソーの『人間不平等起源論』を見いだすことができる。彼はその中で人間の所与の条件から不平等という制度が

性欲が例示しているように、生の欲動一般はいろいろの要素を結びつけて統一体を作る欲動である。それはエロスとも呼ばれている。たとえば、微小な生命要素が集まって細胞を作り、細胞が集まって器官やさらには有機体を作る。個人が相互に牽引し合うのもこのエロスの働きである。

ここでフロイトから離れることになるが、部分もその下位の要素にとっては全体であり、この全体はより上位の全体にとっては部分である、というホロン (holon) の考え方を、エロスの概念に適用することができる。A. ケストラーに従えば、あらゆる単位は下に向かっては全体 (hole) であり、上に向かっては要素 (on) である。そうすると、究極の全体という観念に到達する。それはいかなるものの部分ともなりえないような全体そのものである。我々はそのような全体としての生命そのものを考えることができる。エロスは諸要素を結びつけて統一体を作る働きであるが、この働きを要素の内部においてとらえると、より大きい全体と一体化したい衝迫 (Drang, pressure) という概念となる。フロイトの思想を独自の仕方では体系化した N. O. ブラウンは、一体化の最も根源的な衝迫として、自分が生まれてきた母親との一体化の衝迫を考えている。しかし、母親と一体化することは、同時に彼女を通して究極の生命そのものと一体化することでもあるのだ。

一方、フロイトは生の欲動に対抗する死の欲動をも仮定した。それはタナトスとも呼ばれている。エロス 1 元論でないところにフロイトの思想の複雑さがある。彼にとっての異端の弟子 C. G. ユングは 1 元論を採ったので、その点だけからしても両者はそれぞれ別の道を歩まなければならなかった。生の欲動と死の欲動の 2 元論に到達するまで、フロイトはまず性欲動と自己保存欲動の対立、次いで自我リビドーと対象リビドーの対立、さらには愛と憎しみの対立を構想していた。し

どうして出てきたかを論じている。

かし、これらの対立の理論は臨床的研究のデータとあい入れないためにつぎつぎに捨てられてゆき、最後に生の欲動・対・死の欲動の図式に到達した。対立する両項の内容は変わっても、2元論への固執は変わらなかった。それはフロイトが、人間は他の動物と異なり、本性上矛盾を内蔵する生きものであると確信し続けたからであろう。矛盾の存在の前提は矛盾の解決の帰結を予想させる。フロイトはその矛盾の解決にはいたらなかったが、生涯にわたる理論構築への執拗な努力はその矛盾の解決をめざしていたと解されるので、彼を弁証法的思想家の1人に数えることができるであろう。

以下ではフロイト・ブラウン*の人間学の基本的仮定を述べる。私はこの仮定に必ずしも全面的に従いはしないが、この仮定なしには議論を展開することができない。議論の出発点となるので、この仮定を明示しておく必要がある。

それでは、死の欲動はどんな意味で生の欲動と対立するのであるか。生の欲動が諸要素を結びつける働きをするのに対し、死の欲動は諸要素を相互に引き離す働きをする。この諸単位間を結びつける作用は全体と個体との関係においても現れる。生の欲動は個体をして全体の1部と化そうとする。これに対して死の欲動は個体を全体から引き離す。それゆえ、死の欲動とは別離の欲動なのである。その根源的形態は子供が母親からの、あるいは母親の象徴する究極の生命そのものである全体からの別離である。それは欲動であるがゆえに、子供の内側から彼または彼女を、理由がわからないまま別離へ向かって衝き動かす衝迫となる。

動物における生と死の調和

それでは、別離の衝迫はなぜ起こってくるのか。すべての動物がそうであるように、ヒトという種もみずからを保存するためには個体の

* N. O. Brown, *Life against Death: The Psychological Meaning of History*, Weslegan Univ. Press, 1959. 以下でフロイト・ブラウンと表記する場合、それはこの書の中でフロイト解釈を行なっているブラウンを指す。

自己保存の力にも頼らなければならない。個体が独りでみずからを護る力をもたない種は滅びる。そこで人間の個体も独りで自己を護る力を養うため、ある時期がくれば母親から独立してゆくのである。この別離あるいは独立の衝迫は、個体を全体から分離する死の欲動に根ざしている。死の欲動は種の存続の要請に根ざしているので、別離を強いられる個体の側ではどうして自分が母親から別離を行わなければならないかの動機を、自分自身の意識の中に見いだすことができない。子供は意識の領域では母親に愛着しているからである。死の欲動は個体の意識の届かない層で働いている。自己保存の傾向は死の欲動から出てくるのだと言うと、奇妙に思われる読者もいるだろう。自己を保存するとは生きることであるのに、どうしてそれが死と関係があるのか。その疑問に答えるためには死の欲動の概念をさらに明確にしなければならない。

動物の個体は一般に種の存続のためには喜んで死を受け入れるように見える。種を保存するために死のうとする個体は、それゆえにまた、自己の内部からの命令と関係のない外部の力によって殺されることをいやがる。個体が全体（種）から独立して強くなろうとするのも、外力による死に抵抗するのも、実は個体としての使命を自然に全うして死ぬ、あるいは種の保存のために闘って死ぬことを願っているからなのだ。したがって、普通の動物の場合には生の欲動と死の欲動とのあいだに矛盾はない。個体として生きるとは種のために死ぬことなのである。しかし、人間の個体だけは、個体としての使命を全うしたあとでも、また種のためであっても死ぬことを恐れる。どうしてなのか。

どうして人間のみが単なる個体として、みずからだけのためにいつまでも生き続けることを願うのだろうか。ただし、デュルケームが洞察したように、人間はただ自分だけを目的として生きるように造られ

てはいないから、自分だけを目的として生きてゆく個人は病理的状态に陥りがちである*。しかし今問題にしているのは、自分だけを目的として幸福に生きることができるかどうかということではなく、人間はなぜ一般にいつまでも、自分だけのためであっても、生き長らえようとする願望をもっているかということなのである。どうして人間はこんなのだろうか。それは生の欲動と死の欲動、エロスとタナトスのあいだの調和が壊れてしまっているからなのだ。動物の中ではこの調和が保たれている。人間の中だけで両者が調和せず、相互に対峙しているのである。

人間における生と死の不調和

ではどうして人間においては生の欲動と死の欲動のあいだの自然の調和が壊れたのであろうか。それは2つの欲動が共に肥大し過ぎてしまったためである。人間の個体は、全体との一体化を際限なく強く求めるようになり、また一体化する全体の範囲も時としては種を越えて広がる傾向がある。つまり、生の欲動の肥大化が起こったのである。それが肥大化すると、これに対抗する必要上死の欲動も肥大化せざるをえない。そうでないと、個体は巨大なエロスに呑み込まれてしまって、個体としての独立性を失ってしまう。そうすると、弱くなった個体は自立してみずからを保存する力を失う。だから、自然は個体に対して全体のもつ魅力の網から身を振りほどくよう命令する。全体のもつ魅力が強ければ強いほど、そこから離脱する斥力も強くならざるをえない。これが死の欲動の肥大化なのである。その結果、動物とは異なって人間の個体は、種の一員として安らかに死ぬ用意がなくなってしまう。動物においては生の欲動と死の欲動とが適当な強さなので、両者が調和しているが、人間においてはその調和が壊れてしまった。動物の個体は個体として平静に生き、種の一員として平静に死ぬ。と

* デュルケーム（宮島喬訳）『自殺論』3刷，中公文庫，p. 250。